

Title	夢中放尿の話
Author(s)	井本, 英一
Citation	大阪外国語大学論集. 4 p.153-p.160
Issue Date	1990-12-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79517
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

夢 中 放 尿 の 話

井 本 英 一

ヘロドトスは、古代ペルシア帝国を創建したキュロス大王の誕生にまつわる話を伝えている。古代イランのメディア王国は、ペルシア帝国の前に栄えた同じイラン民族の国であった。この国のアステュアゲス王にはマンダネという娘があった。あるとき、王はこの娘が放尿してその尿が町中に溢れ、さらにアジア全土に氾濫する夢を見た。王は夢占いの者にその意味をたずねて愕然とした。そこで娘が年頃に達したとき、自分の地位に釣り合うようなメディア人からは婿を選ばず、カンビュセスというペルシア人の小王に娘を与えた。ペルシア人は同じイラン人であるが、メディア人よりはずっと低い地位にあったので夢が実現して自分の王国が奪われることはあるまいと考えたからである。

ところが、マンダネがカンビュセスに嫁いだ年、アステュアゲスはまた夢を見た。娘の陰部から一本の葡萄の樹が生え、その樹がアジア全土を覆ったという夢である。彼は夢占いの者にこのことを告げてから妊娠中の娘をペルシアから呼び寄せ、娘を厳重に監視させた。夢占いが、娘の生む子がやがて彼に代わって王になるはずだと告げたので、その子を殺すつもりであった。そこで、キュロスが生まれると、王は一族のハルパゴスという者にこの子を渡し、家に連れて帰って殺すように命じた（『歴史』1・107-108、松平千秋訳、岩波文庫）。このあと、有名な「嬰兒キュロスの捨て子物語」がつづく。

南方熊楠は「トーテムと命名」（『南方熊楠全集』3、平凡社）の中で『多武峰縁起』に、藤原鎌足の母が妊娠したとき、その身から藤の花が生じ、あまねく日域に満ちた夢を見たとか、『神明鏡』に、その母の玉門から藤が生い出で、日本国に蔓延し花咲くと夢見て妊娠したといい、子孫が、多く藤を紋章とするが、藤が藤原氏のトーテムとなった、といっている（448頁）。大林太良氏は、前掲書の巻末の解説「南方の学問的系譜と民族学」の中で、南方のいう藤原氏のトーテムは藤であったという説を批判し、ヘロドトスの前掲の箇所をあげ、その共通するモチーフは偶然であるとは思われない。藤と葡萄はいずれも蔓であることも共通している。日本とイランの中間の地域にこれほど類似した話は見つかっていない、といっている。

メディア王アステュアゲスは、まだ生まれ出ないキュロスに対して恐怖心をもったが、メディア王国を乗とったキュロス大王は、自分の支族とは別の支族に属する無名のダリウスの夢を見て恐れる。キュロスはマッサゲタイ人を征伐するためアラクセス川を渡ったが、その夜、夢を見た。それによると、ヒュスタスベスの長男ダリウスが両肩に羽根をつけて現れ、一方の羽根でア

シアを、他方の羽根でヨーロッパを覆った。キュロスは、ダリウスが自分に謀反を企んでいるのだと思う。しかし、夢の真の意味は、キュロスがこの地で最期を遂げ、王位がダリウスに移ることであった（ヘロドトス、前掲書、1・209-210）。他人に王権が移動するのを夢で見るのは、イランの、あるいは他の多くの文化の伝統であった。ペルシア帝国最後の王ダリウス三世は、一人の男が王が身につけるマントを着て玉座に座る夢を見た。この男がアレクサンダー大王であることはいうまでもないが、この話は『シャー・ナーメ』をはじめとするアレクサンダー伝説に伝えられている。蔓性の植物が地面を覆うようにして広がるというのは、女性の胎内から出た生命の樹が繁茂する姿であるので、何か偉大な人物やものごとの誕生の前兆とされたに違いない。このモチーフは単独で存在したのではなく、洪水のモチーフと組み合わせになっていたと考えられる。

ノアの方舟の伝説では、ノアは大洪水のあと方舟から出て葡萄の樹を栽培した。葡萄は始祖の誕生と関連したらしい。ノアが方舟を出ると、神は「生めよ。殖えよ。地に満てよ」といって、方舟に乗せてきた人間をはじめ、動植物を繁殖させた。ノアの三人の息子であるハムとセムとヤベテは、それぞれの種族の祖となった。同じ大洪水の話でも、東アジアでは方舟は大きなひょうたん形で表わされ、洪水の原因は、山と積まれた瓜をタテに切るかヨコに切るかの禁忌を破り、あべこべの切り方をしたためとする。ここでは蔓性の植物はウリ科の植物が代表している。蔓は大地を覆うのではなく、その果実が無数に積まれる。

瓜と大洪水の話は7月7日（1月7日の人日から数えて、ちょうど半年になる）のできごとである。洪水の表われである天の川を挟んで男女二神が相対し、カササギが広げて架けてくれた翼の橋を渡り、年一回の交会を楽しむ。その結果は翌年4月8日の釈迦誕生日を待たなければならない。7月7日に直接、子供が手に入るわけではない。この日は西アジアにおける男女の年一回の交会の日である春分の日に対応する。春分の直後、カトリックの伝承では、大天使ガブリエルがヨセフのいいなずけであったマリアに、精霊によって神の子を受胎したことを告げる。その結果は冬至のころに神の子として生まれる。ところで、7月7日は『プルターク英雄伝』の「ロムルス」にあるように、ロムルスが山羊の沼で雷に打たれて死ぬ日である。いっぽう、イエスは春分後の最初の満月のあとの金曜に処刑され、三日後の日曜に復活する。このような移動暦になる以前は、イエスはユリウス暦3月25日に処刑され、27日に復活したらしい。つまり、春分は受胎する日でもあり、殺害される日でもあった。殺害された者、あるいは自然死した者の魂は、ただちに女性の胎内に入って転生しようとしたのである。

ローマの建設者ロムルスは水辺で非業の死を遂げたが、彼の誕生には洪水（川）や生命樹に関するモチーフが見られる。ウェスタの巫女シルウィアは水を汲みに川に出かける。川の流れのせせらぎや鳥の声に聞きはれているうちにまどろんでしまう。これを見たマルス神は思いを遂げてしまう。シルウィアは目を覚ますと身が重くなって、のちのローマの建設者を宿していたのである。彼女はその間に夢を見た。彼女がトロイアの火をじっと見つめていると、髪の毛から髪紐が

火の前に落ち、そこから二本のシュロの木が成長した。そのうちの一本は巨樹になり、全世界を覆った。そのとき、叔父が斧を振り上げて二本の木を倒そうとするが、牝狼とキツツキがこれを守った（オウィディウス『ファステイ』三月の項、松田治『ローマ神話の発生』社会思想社、1980年、40-43頁）。この伝説では、ローマの始祖ロムルスの母は夢で二本の巨樹を見るが、それは蔓ではない。しかし、シュロの巨樹は全世界を覆う。洪水は発生しないが、川に水汲みにいって堤のところでうたたねをしている。雷沢でうたた寝をしている女性に雷・天神が降り、その女性が孕って周の始祖を生む話が中国にあるが、そこには樹木や世界を覆うモチーフはない。

ローマの始祖ロムルスの伝説は、捨て子にされて牝狼に育てられる点、捨て子にされたキュロスが牝犬という名の牛飼いの妻に育てられた点と似ているので、樹木が大地を覆う共通したモチーフがあっても不思議ではない。天の川のモチーフには、犬飼い、牛引きのモチーフがある。天の川自体が洪水と見られるが、瓜は樹木の一種であったのが、始祖を生む母胎としての機能をもつために、それが強調されたのであろう。朝鮮の民話では、一人の仙女が桂の樹の下で樹の精に感じて一人の子供を生んだ。仙女はその子が7つ8つくらいとき、子供をその樹の下に一人置いて天に昇ってしまう。あるとき洪水が発生し、その樹のところにまで及んだ。樹はその子に自分が倒れたらすぐ幹の背中に乗ると助かるだろうという。子供は父である樹木のいったとおりにする。途中、蟻や蚊が助けてくれというので樹に乗せてやる。さらに流されていくと人間の子供が助けてくれと叫んでいる。樹の子は父なる樹の意思に反してその子を樹に乗せてやる。のちにトラブルの原因となるが、蟻や蚊が恩返しをしてくれたので助かる（孫晋泰『朝鮮の民話』岩崎美術社、1966年、「大洪水と人類」その1）。ここでは洪水の中を流れていく樹木は、人間を始め、動植物の種子を入れたノアの方舟に相当する。朝鮮では、二人の子供は高い山の頂に着き、二人の娘と結婚する。ローマの始祖ロムルスは、大洪水の中、他の舟は沈んでしまったが、レムスと二人で舟に乗り生き残る（『プルターク英雄伝』「ロムルス」2）。

大洪水のあと男子二人が生き残り、別の女子と結婚とするというのは母系社会の残影と考えられる。そのほか、大洪水伝説には、兄妹二人だけが生き残り、結婚して始祖を生む話もある（孫、前掲書、「大洪水と人類」その3）。この種の話は東南アジアに普通に見られるもので、兄妹婚や父娘婚はタブーとされる始原の婚姻である。始祖を生むには始原のタブーにかかわらなければならなかったのである。日本神話では、イザナギノミコトとイザナミノミコトの神話の中にその名残が見られるようである。この両神は、イザナギが日・月を生み、イザナミが水神・土神・豊穰神を生むので天神と地母神であった。イザナミはカグツチを生んで身を焼かれて死んだので、イザナギは黄泉の国に彼女を訪ねていく。彼女から、自分の姿を見ないで欲しいといわれたが、彼は彼女の腐乱した死体を見て驚いて逃走する。そのあとをヨモツシコメが八人追ってきた。イザナギは頭に巻いた黒いつる草を投げたところ、それが葡萄に変化した。シコメらはその果実を食べ、食べおわるとまた追ってきた。今度は櫛を投げたところ、たけのこになった。シコメらはそれを食べ、食べおわるとまた追ってきた。そのあとからイザナミ自身も追ってきた。一説では、

イザナギがよもつ平坂に達する前に、大樹に向かって小便した。するとそれが巨大な川となった。シコメらがそれを渡ろうとしている間に、イザナギは平坂を越えることができた（『日本書紀』巻第一 第五段）。

古代オリエントのシュメール語とアッカド語による『イナンナ（イシュタル）女神の冥界下り』では、女神が、死んだわが子であり夫である幼童神を冥界に訪ねていく。ギリシア神話では、蛇に咬まれて死んだエウリディケを夫のオルベウスが冥界に下って訪ねていく。彼は地上に出るまで後ろを振り向かない約束で、エウリディケを地上へ連れて出ようとしたが、その直前に振り返ってエウリディケを見たため、彼女はふたたび冥界にひき戻された。オルベウスはイザナギと同じように男性で冥界下りをする。ところで、イザナギの冥界からの逃走は呪的逃走といわれるもので、物を投げて障害物をつくり、その隙に逃走する。用いられた物には蔓や葡萄がある。それは単なる障害物で、天下を覆うようなものではない。しかし次のタケノコのように、短時間で成長するという意味が隠されているようである。イザナギの冥界下りは男性原理であるので、彼が小便をすると洪水になり巨大な川となる。大樹に向かって小便したとあるが、朝鮮の民話では洪水によって大樹が流される。ローマの始祖ロムルスの話では、水を汲みにいったシルウィアの髪紐がシュロの木になった。ここでも川と巨樹が一組になっている。シルウィアはまどろむが、小便した夢を見たわけではない。しかし、川辺にシュロの巨樹が立つ夢を見ている。総合的に見るとキュロスの母マンドネの伝説に似ていることが分かる。

同時代のペルシア人は川に小便したり、唾を吐くことはなく、川で手を洗うこともなかった。彼らは河川を非常に尊敬したからである（ヘロドトス、前掲書、1・138）。アフラマズダーは天神で、ヘロドトスはギリシア神のゼウスをこれに当てる。川は水神アナーヒターと同一視されたので、そこに小便をすることは許されなかったのであろう。小便は穢れと見なされ、川の水を穢すと考えられた。ペルシア人によれば流れる水は清らかでかつ神聖であるので、川であれ用水の水流であれ、それを穢すことは許されなかった。

イラン人男性は伝統的にしゃがんで小便する。もちろん、都会生活をする人たちは別であるが、首都の下町の住人は、公衆便所でも立って小便せず、しゃがんでするのを目撃したことがある。現代の地方のイラン人女性の小便をしているのを見たことはないが、伝統的には女性は立って用を足したものである。遠く離れたアフリカのナイジェリアのヤシ林の中で女性は立って、男は坐って小便するのを見たという記事を目にしたことがある。（『読売新聞』1988年10月4日）。ヘロドトスによるとエジプト人は、この国独特の風土と、他の河川と性格を異にする河とに相応じたかの如く、ほとんどあらゆる点で他民族とは正反対の風俗習慣をもつようになった。女は市場へ出て商いをするのに、男は家にいて機織りする。小便をするのに、女は立ってし、男はしゃがんでする（2・35）。この記述からすると、ギリシア人の間では、男は立って小便し、女は坐って小便したと考えられる。男女の小便する姿勢が違うのは、よくは分からないが、もとは何かの意味をもっていたように思われる。現代のイラン女性で、自分の運勢を開きたい女性は、小児の

男根に小便する。さらに、小児がした小便の上に小便する。あるいは、朝早く四辻にいきそこで小便すると願いがかなえられる（R・ショクールザーデ『ホラサン人の信仰と習俗』テヘラン、72頁）。女性は男性の小便の上に小便しなければならないが、多量の小便になることが暗に意味される。四辻で小便するというのは、この世とあの世の境界である辻で、小便の川をつくるということであった。多量の尿、川、洪水という図式が背後にあったであろう。さらに、辻で小便することは境界を穢す行為で、出産その他の呪術的実修であったと考えられる。小児の小便に重ねるのはその表れの一つであろう。木内石亭の『雲根志』（中川泉三編、昭和11年）によると、播州横坂村に七つの大石があり、どの石も凹形である。大きい石は水一石が入る。旱天のとき、近郷の百姓が集まり、石の上や近辺を綺麗に掃除し、そのあと穢れたものを凹形の中に投げ入れ、急いで逃げ去る。すると暴風雨が起って、中の不浄を洗い流すほどの大雨が降る（『木内石亭全集』巻五『雲根志三編』巻之三、奇怪類四）。ここでは、境界石を糞尿で穢すことによって大雨や洪水を起こしている。小便と洪水との関係は、激しく出る小便の量への連想もあるであろうが、境界の穢れが大雨を呼ぶという民俗にもとづくようである。ここでは、尿の主体が男であるか女であるかの区別はない。夢のモチーフもない。旱魃のあと、糞尿と大雨のモチーフが用いられ、草木が繁茂する。イランのキュロス大王の出生説話では、その母の陰部から出た尿が大洪水を起こし、別のとき、同じ場所から葡萄の木が生えて成長する。肥料としての尿は、計り知れないほど昔から人々に知られていたと思われる。

イランでは、キュロスの母マンダネの小便や、その陰部から葡萄の木が生えた模様は、マンダネの父であるアステアゲスが夢で見たものであった。類似の話が朝鮮に見られるが、ここでは本人が小便をした夢を見ている。『三国遺事』に次のようにいう。新羅第29代の太宗の妃は新羅の名将金庾信^{ぎんしん}の末の妹であった。むかし、文姫の姉の宝姫が夢で西岳に登って小便すると、都が小便で一杯になった。翌朝、妹に夢の話をする。妹は錦のチマと交換に姉からその夢を買った。それから10日ほどたって、まだ太宗にならない春秋公と縁があり、公の子を妊った。この場合も、最初、姉にチャンスがめぐってくるが、姉は身を引いている。眞徳王亡きあと、春秋公が太宗を称し、文姫は文明皇后となる。太子の法敏はのちに文武王となる。王の遺骸は東海の中の大王岩という岩に葬られているので有名である。文武王のとき、海中に女の死体があった。身長が73尺、足の長さが6尺、陰部の長さが3尺もあった。身長が18尺であったともいわれている（金思煒訳、朝日新聞社、昭和51年、110-111、125-127頁）。新羅の話では、姉妹二人のうち、二度にわたって幸運が妹に移り、姉は貧乏くじを引いている。イランのキュロス伝説では、父アステアゲスの夢を娘のマンダネが買いとるわけではないが、これも二度にわたってツキが父から娘に移っている。この伝承には、夢と現実、死と再生の図式が見られる。いずれの場合も、運に恵まれた娘は妊娠する。日本神話では男女がさかさまになっているが、イザナギがイザナミの死体を見て恐れて逃走し、冥界とこの世の境で小便し、アワキハラで禊をして三貴子をもうける。ここでは、死と再生の図式が明瞭に見られる。朝鮮の伝承では、宝姫は夢で西岳に登り小便した。山上で小

便することはタブーであったはずである。『魏書』「勿吉伝」によると、この国の南にある大白山には、虎・豹・熊・狼がいて人に危害を加える。人は山上で小便して汚してはならない。山に行く者はみな器物に汚物を入れて帰る、という（『騎馬民族史』1、内田吟風、田村実造他訳、平凡社、昭和46年、343-344頁）。勿吉は高句麗の北にあり、ツングース系民族と見られる。新羅の宝姫が山上で小便して汚したのは、再生直前の呪術的行為であったと考えられる。つまり、境界を穢す行為である。直接、山上の土の上に小便するのは大洪水の原因となったのであろう。山の神を怒らせることになり、大雨で穢れを流すうちに大洪水になると考えられたと思う。もう一つ重要な原因が考えられた。それは、山上に小便の塩分を残すと、狼などの野獣がそれを舐めにやってきて、人に危害を加える恐れがあるからである。宮本常一「塩の道」にいう。山の中で働く人たちは、壺の中に小便をしてはいけないといわれていた。つばに小便が溜ると、かならず狼が舐めにくるといわれた。そこで、小便は底の抜けたものにしなければならなかった。立ち小便も許されなかった。立ち小便が木の葉にかかると、それを食べに狼がくるといわれていた。底の抜けたものに立ち小便をすると、それはずっと流れて海にゆき、また塩になると考えられた。

（山田宗陸他『道の文化』講談社、昭和54年、243頁）。朝鮮の習俗と日本のそれには細部に異同があるが、山上での小便は山の神を誘ったり怒らせたりする危険がある。もとは朝鮮のように、小便は容器に入れてもって下りたのであろう。こうすることによって、旱魃と洪水を避けることができた。『三国史記』「新羅本紀」文武王では、宝姫は、しゃがんで小便をし、それが流れて都を水びたしにした夢を見ている（金思煒訳、六興出版、昭和55年）。しゃがんで小便すると、注意して木の葉にかけたりしなくて済むが、同性の山の神を怒らせることは間違いない。姉の宝姫から夢を買って皇后になった文姫の子である文武王は、大洪水のあとに生まれたいわば中興の祖であるが、王が即位して数年のち、巨大な女の死体が現れた。この巨人こそ、洪水の生みの親であったのが、その務めを遂げて死体で現れたのであろう。わが国のダイダラボッチの女性版よろしく、足の長さが特に記述してあったり、洪水を首肯せしめる陰部の大きさがあげてある。ラブレの作品に出る巨人族のガルガンチュワは、パリに連れてこられたとき、ノートルダムの塔に腰かけ、その一物を宙に抜き出し、人々めがけて勢いよく金色の雨を降らしたので、そのために溺れ死んだ者の数は、女や子供を除いて26万418人であった（『ガルガンチュワ物語』渡辺一夫訳、岩波文庫、94頁）。この場合、パリを治める傑物が生まれるわけではなく、それまでリュセース（白いもの）と呼ばれていた町がパリ（笑いこけて）と呼ばれるようになったという由来話がついている。

新羅と同じモチーフは、高麗の建国譚にも見られる。任東権『韓国の民族と伝承』（熊谷治・依田千百子訳、桜楓社、昭和59年）の「放尿夢考」は新羅の宝姫の放尿夢と妹の文姫の話について、高麗の建国説話における放尿夢をあげている。高麗の太祖の曾祖母の父にあたる宝育が出家して修業しているとき、夢で山に登り、南に小便したところ、三韓が水びたしになって山川は銀色の海となった。翌日、宝育は兄の伊帝建にこのことを話した。すると、兄は汝はきっと天を支える

柱にも等しい子をもうけるだろうとあって、自分の娘の徳周を弟に与えた。宝育は二人の娘をもうけたが、姉の方が夢で山上で小便すると国中に溢れた。妹の辰義に夢の話をする、妹はチマと交換にこれを買った。たまたま中国の肅宗が天下を遊覧して朝鮮にきたさい、宝育の家に立ち寄った。このとき、姉の方はチャンスが遠のき、妹の辰義に幸運がめぐってきて、肅宗の子を宿し、太祖王建の祖父である作帝建を生んだ(82-83頁)。高麗五代の王景宗の妃は、景宗の薨後、未亡人となり私邸に住んでいたが、ある日山に登り放尿したところ、国中が洪水になり銀の海に変わった夢を見た。夢占いでは、生まれる子は王になり、一国を支配するということであった。その後未亡人は安宗と通じて妊娠した。安宗は流され、未亡人は柳の木をつかんで出産して死んだ。成宗は乳母を置いて育てさせた。その子は成長して八代の王顯宗になった(84頁)。

高麗の建国説話では、父の宝育は自分の小便が三韓を水びたしにした夢を見た。ヘロドトスの伝えるキュロスの母マンダネの父のアステュアゲス王は、夢で娘が小便し、それが洪水になって都やアジア全域に溢れる夢を見ている。どちらの形式がより古いのかは、にわかに断定できないが、宝育の二人の娘の一方から他方に幸運が移る話は根本的なものであったと考えられる。幸運を買うのは朝鮮の説話のモチーフの一つであろう。相手に暑さを売ったり、相手から涼しさを買ったりするのは朝鮮の民俗行事にも見られるからである。小便は南に向かってすることはできた。國分直一『壺を祀る村』(法制大学出版局、1981年)によると、北斗星群は道教の教典の中ではことに尊ばれ、北に向かって放尿することは禁じられている。南斗星群は人の生死を司る(341頁)。高麗の建国説話で、南に向かって小便すると洪水になり、子をもうけることになるが、南方を穢すことによって誕生をうながしたのであろう。宝育の二人の娘のうち、妹の辰義に運がおとずれる。肅宗の求めに応じ、姉が敷居を越えるやいなや鼻血を出したので、妹が肅宗と縁を結んだ。敷居は古くは祭壇とされた神聖な場所であった。そこで出血するのは、いけにえの死を意味していたと思われる。姉は死を象徴し、妹は再生を象徴した。高麗の景宗の未亡人は安宗と近親相姦し、柳の木をつかんで出産し、死んだ。この王后の場合は、一人で死と再生を演じている。木をつかんでお産をするモチーフは釈迦の母摩耶夫人の例その他があり、夫人は釈迦を生んで一週間後に他界する。釈迦は夫人の妹に育てられる。日本神話では、山幸彦が海神の娘の豊玉姫と結婚し帰国する。豊玉姫もあとを追ってくる。姫は出産するために海辺に産屋を建てさせる。出産中は覗かないようにと夫に求めるが、夫はその禁を破ったので、姫は赤子を置いて海神の宮に帰ってしまう。しかし、産んだ子を不憫に思い、妹の玉依姫を送って子供ウガヤフキアエズノミコトを育てさせた。日本神話では、豊玉姫の海神宮への帰還は死を象徴するので、豊玉姫も摩耶夫人と同じように、一人で死と再生を演じているといえる。豊玉姫の出産には木が見られないが、山幸彦は桂の木に登ってその影が泉の水に映るので水を汲みにきた女に見つかった。ここではモチーフは別々に離れて用いられているようである。

朝鮮の放尿夢譚は、すべて新羅の宝姫と文姫の話と同系と考えられる。山上で小便することや洪水になることはみな共通している。ノアの方舟と洪水もアララト山と関係しているので、広域

にわたる洪水説話の一つと考えられる。洪水のとき流される一本の樹木は、方舟をはじめ葡萄の木、藤、柳、桂などによって代表される。これらのモチーフは、建国、始祖・中興の祖の誕生と深い関連をもっていたことは上巻の諸例で明らかになった。

20世紀の初めまで、カンボジアにはカンボジア王室のほかに、火の王と水の王という二人の呪術的な王が人里離れた森の奥に住んでいた。これらの王は、七つの山の上に立った塔に毎年移り住み、七年で王の任期を終えた。しかし、実際は、任期を満了する前に死ぬことが多かった。これらの王に三種類の呪物があった。一は、大昔、最後の大洪水のときに、クイという蔓植物から採取された果実で、今も取れたてのように新鮮である。二は、非常に古い幹であるが、しばむことのない花をつけた藤、三は、常に剣を守り、奇跡を行う精霊が宿る剣である。水の王は、初めの二つの呪物で洪水をひき起こし、大地をすべて水びたしにすることができる（J. G. フレイザー『呪術と王の進化』第2巻、ロンドン、1911年、3－5頁）。カンボジアの水の王の場合、山、洪水、クイや藤のような始原の大洪水のときの蔓植物のモチーフが見られる。火の王と水の王の間には、死と再生の関係はない。朝鮮の姉妹に見られるような、夢で放尿するモチーフもない。葡萄の木や藤の木と同じように、カンボジアの蔓植物も始祖や王権の発生と深い関わりがあった。大洪水だけでもそれはあった。古代メソポタミアでは八人の王が24万1200年統治した。そのとき大洪水が国中を洗い流した。これで一時代が終わりを告げた出来事を述べている。その後、王権は再び天より下った（ジャック・フィネガン『考古学から見た古代オリエント史』三笠宮崇仁訳、岩波書店、1983年、31－32頁）。大洪水のあと、全てが洗い去られ、ものごとが新しく始まったのである。「創世記」では、大洪水のあと、神はノアと最初の契約を結んだ（9・8以下）。尿が大洪水を引き起こす背景に、尿が溜る膀胱に対する信仰があったようである。フレイザーがE. W. ネルソンの『ベーリング海峡周辺のエスキモー』から引用しているところによると、アザラシ、セイウチ、クジラのような死んだ海獣の魂は彼らの膀胱に残留している。そこで、膀胱を海に返すことによってこれらの動物は再び肉体を回復し、狩猟者のための獲物は増加する、と彼らは信じている。（『穀物と野生動物の霊魂』第2巻、ロンドン、1912年、247頁）。これらの狩猟・漁撈民族は、採取した魚の小骨一本失うことなく海に投入し、その魚を再生させる習慣ももっている。膀胱は、生命の宿る部位の一つである。骨に小便をかける風習があるが、後で考えてみたい。金烈圭『韓国民間伝承と民話の研究』（依田千百子訳、学生社、昭和53年）によると、朝鮮の放尿夢の話は、ゲザ・ローハイムが例としてあげた「瓶が大きな湖水になる物語」類の民話と同様に、小便をせずに、小便で膀胱がいっぱいになったまま寝ている人間（患者）が洪水の夢を見るのと表裏の関係をなしている。また、尿意刺激が性的刺激に変わることもあるので、思春期の男女の潜在的性欲の象徴表現でもある。大洪水は原水と関係があるので、出産や再生の話につながるものであろう（247頁）。

（1990. 9. 18 受理）